

米欧でコロナ派生型「BQ.1」増加、アジアでは「XBB」

2022年11月6日日本経済新聞

新型コロナウイルスのオミクロン型の新たな派生型の拡大が鮮明となってきた。米欧では直近の主流だった「BA.5」に変異が加わった「BQ.1」や「BQ.1.1」が計26~27%に増加。シンガポールやインドでは2種類の派生型の遺伝子が混ざった組み換えウイルス「XBB」が広がる。地域によって派生型の流行が異なる複雑な状況になり、感染再拡大などの先行きは見通せない。

米欧とアジアで異なる派生型が広がる			
派生型	見つかっている国	特徴	
BQ.1	米国、英国、フランス、デンマークなど（日本でも検出）	・BA.5から派生 ・さらに変異が加わった BQ.1.1も拡大	・免疫をすり抜ける性質が強い ・再感染やブレイクスルー感染が起こりやすい可能性
XBB	シンガポール、インド、バングラデシュなど（日本でも検出）	・2種類の派生型の遺伝子が混ざった組み換えウイルス	

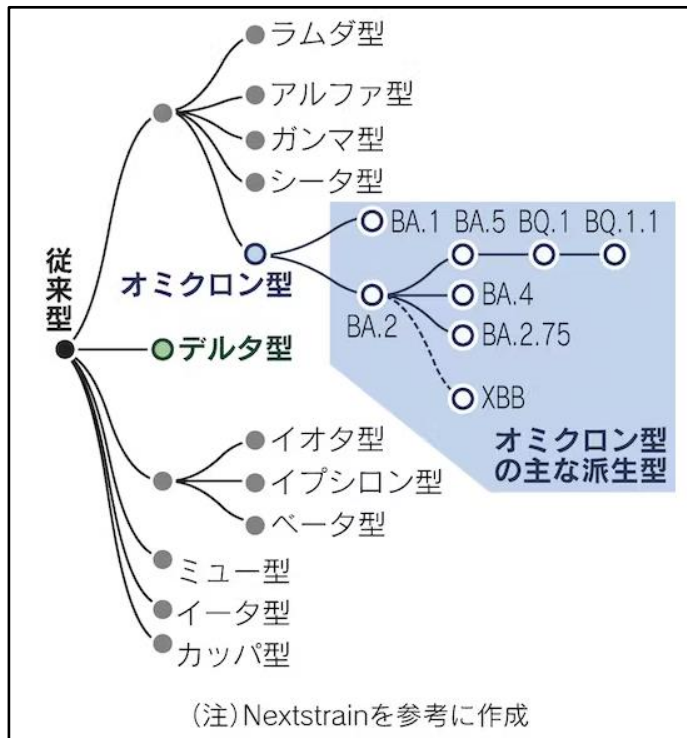
英保健安全局は10月20日時点のイングランド地方でBQ.1.1が12%、BQ.1.1を除くBQ.1系統が14%などと推定している。BA.5から置き換わりが進んでおり、BQ.1.1やBQ.1は1週間の増加スピードがBA.5の1.5~1.6倍程度と分析する。米国でも米疾病対策センター（CDC）は10月23~29日の新規感染のうち、BQ.1が14%、BQ.1.1が13%などと推定する。BA.5は50%まで低下した。

BQ.1.1はBQ.1にさらに変異が加わった派生型だ。BQ.1系統はフランス、デンマークなど欧州でも増加しており、欧州疾病予防管理センター（ECDC）は11月中旬~12月上旬には欧州の新規感染の50%以上、2023年初めには80%以上を占めると予測する。

一方、シンガポールやインド、バングラデシュなどでは組み換えウイルスであるXBBが拡大している。XBBはシンガポールで最初に見つかり、「BA.2」に変異が加わった2種類の派生型の遺伝子配列の一部が置き換わったウイルスだ。2種類の派生型に同時に感染した人の体内で生まれたと考えられる。

現在広がる派生型に共通するのは、新たに獲得した変異によって免疫をすり抜ける「免疫逃避」の性質が一段と強いとみられることだ。中国・北京大学や米オハイオ州立大学などの研究報告によると、様々な種類が見つかっている派生型の中でもBQ.1系統やXBBは特に免疫逃避が強い。ワクチンや感染でできた抗体が効きにくく、再感染やワクチン接種

後のブレークスルー感染が起こりやすい可能性がある。



もともとオミクロン型はデルタ型よりも免疫をすり抜けやすく、その性質によって世界で爆発的に広がった。世界でオミクロン型の流行が続く中、免疫をすり抜ける変異を獲得した派生型が各地で誕生し、勢力拡大を競っているような状況だ。BQ.1やBQ.1.1、XBBは東京都など国内でも見つかっている。第8波はBA.5から新たな派生型へと置き換わりが進む形で起こる可能性もある。

変異の多さからBQ.1.1は「ケルベロス」、XBBは「グリフォン」の俗称で呼ばれることもあるが、いずれもオミクロン型から派生したウイルスであることに変わりはない。現時点で重症化リスクは大きく変わらないとみられてお

り、米ファイザーや米モデルナが開発したオミクロン型対応ワクチンの追加接種にも一定の効果が期待される。